

5月24日、僕はギャラリーモリタで行なわれる、「ギャラリーと蒐集家S氏との22年間の物語」のプレオープン企画の懇親会に参加するため、けやき通りを一人歩いていた。まだ時間に余裕があったため、ブックスキューブリックへ立ち寄った。ここには興味をそそられる内容の本が多数ある。その中で、一冊の本のタイトルに僕の心は奪われた。それが「客はアートでやってくる」(山下柚実・著)だった。“客はアートでやってくる？”僕は好奇心のまま、その本を手に取り、ページを捲った。そこには、栃木県の板室という場所にある温泉旅館「大黒屋」が現代アートを取り入れた独特の経営スタイルで、リピーター率73%の黒字経営を続けている、ということが書かれていた。面白い。これは面白過ぎる。僕には以前から一つの葛藤があった。アートというものはやってもお金にはならない、と。お金なんていない、と言えれば良いが、人が食べて生活していく上でお金はどうしても必要になる。アートはやりたい、しかし、お金も欲しい。その両方の欲求を満たすなんてことは不可能であり、このどちらかを選ぶという場合、よっぽどの純粋な芸術家ではない限り、アートではなく、お金を選ぶはずだ。多くの人がある種自分の気持ちを偽りながら、生活の為にアートを捨て、お金を選ぶ。それが今の資本主義経済の世の中では真っ当な思考だろうと思う。僕も以前には、アートを捨てて、生活の為に就職して、お金を選んだことがある。だからかもしれないが、そのあたりのアートとお金の関係性については非常に興味があった。今、僕は自分のアートで何とかお金の繋がらないか、と試行錯誤している段階で、そういった不安定なもやもやとした気持ちがあったからこそ、余計にこの本が救いの一冊に思えたのかもしれない。そこにアートとお金の新たな活路が見出されているのではないか、そんな思いでこの本を購入した。

## 大黒屋に行こう！

6月25日、本を読んでどうしてもこの大黒屋に実際に行ってみたくなり、僕は宿泊の予約を入れた。大黒屋の16代目オーナーである室井俊二氏に「お話ししたい」という旨のメールを送ると、その日に「良いですよ」との返信があり、アートスタイル経営の創始者である室井氏にもお話を聞けることになった。宿泊日である7月18日、僕は胸を弾ませながら栃木県の大黒屋へと向かった。東京から電車で揺られること3時間ほどで旅館への最寄りの駅であるJR黒磯駅に到着。駅からはバスに乗って35分ほどで大黒屋へは着いたのだが、そこで待っていたものは今まで感じたことのないような「空気」であり「気配」であった。「この捉えどころのない感覚は何だろうか？」と不思議な気持ちになった。旅館の入り口である庭に入った瞬間からその初めて体感するような感覚は始まっていて、終始、それは止まなかった。心躍る、ワクワクする、何だかそんな感覚だった。大黒屋の庭やロビー、廊下には抽象的な現代アートの作品が各所に並んでいるのだが、それぞれが自己を主張したような印象を全く与えず、完全に作品同士が「調和」しており、また、風景とも一体となり「調和」していた。旅館全体に統一された「美意識」「哲学」のようなものが流れていると感じた。それは料理からも、温泉からも、従業員のサービスからも共通して感じられ、その徹底した経営哲学を肌で感じることができた。7月19日、東京に出張へ行く前だ、という多忙な室井氏の朝の時間に、個室で1時間半の間、話す機会を設けてもらった。事前に用意していたこちらの質問に誠実に一つ一つ室井氏は答えられた。特にアート論になると、ことさら熱く語られた。あつという間の時間。僕はお礼を言って個室を後にしたのだった。

室井氏はアートスタイル経営について、以下のように説明された。アートスタイル経営において大切なのはアートの純粹で美しい精神で仕事をするることである。「仕事」は「行為」とも置き換えられ、アートの精神を持つかどうかで、その「行為」の質が変わってくる。例えば、「仕草」の一つを行なうにしても、そこに哲学があるかどうかで、それは美しい「仕草」にも変えられる。では、そのアートの精神をどうやって育むのか、というと、それは作品を買うことやアーティストと深く付き合うことで育まれる。「縁」を築き、「時間」を共有し、「アート」に浸ることでアートの精神は磨かれる。アートスタイル経営を実現するために必要なことは、「場をつくる」「表現を意識」「価値づくり」の3つを実践することに尽きる。まず最初に「仕事」の「場」に作品を飾ること、これが「場をつくる」ということ。次に「表現とは何か？」を考えること、これが「表現を意識」するということ。最後に「アート」の「付加価値」を知ること、これが「価値づくり」ということ。非常にシンプルかつ明確だ。

## 楽しく働く。

大黒屋の従業員の中にはアーティストが多い。これもアートスタイル経営の面白い一つの特徴だとも言えるが、アーティストを旅館の従業員として雇用しているのである。アーティストが一本立ちして生活出来るようになるまでは時間が掛かるものだが、ここでなら、アートに触れながら働き、自分の創作活動もできるわけだ。アーティストを目指す卵にはかなり魅力的な職場環境である。さらに自分の得意分野を生かしたもので宿泊客を巻き込んでの企画も行なうことができる。例えば、画家を目指す人なら、旅館で宿泊客と絵を描く企画を実施しても良いのだ。それは旅館にとっても、宿泊客にとっても、その従業員にとっても好ましいことである。従業員が自分の個性を発揮できる環境はやりがいを生み、それは「楽しく働く」ことへと繋がる。一般企業の場合、「仕事」とプライベートな「趣味」「特技」は分けて考えられることが多い。しかし、この大黒屋ではその「趣味」「特技」こそが重視されている。要は好きな分野を生かしてもらうことで、「楽しく働く」環境を作り出しているのである。また、室井氏は「アートの精神は教えられて理解できるものじゃない。その点、アーティストを志す人はすでにその精神を理解しているので働いてもらいやすい」と持論を語られた。旅館業は同じことの繰り返しのように見えて、宿泊客にとっては一回性の出来事であり、これを場所や空間全体を体験させる芸術、一種の「インスタレーション」と考えれば、宿泊客へのおもてなしも作品を作る行為と同じことなのかもしれない。旅館経営も作品作りと同じなのだ。

## 「空気」「気配」

室井氏は旅館業という決められた「枠」の中で仕事をするようになった時、その「枠」が何なのかを知ろうと現代アートに目を向けた、とおっしゃられた。現代アートには「今を生きるための哲学」が隠されているからだ。「本質とは？」「真理とは？」それを知る上でアートと哲学は非常に密接な関係を持っている。それ故に「枠」を知るために現代アートを鑑賞することは必然の流れであり、その中で室井氏は「枠」を知り、その「枠」を超えることも知ったのであった。大黒屋を代表するアーティスト・菅木志雄氏の言葉にこんな言葉がある。「もののリアリティと意識のリアリティは次元は違うが同時であるべきだ」この言葉を室井氏は経営の土台にしている、という。これは具現化された「もの」も目に見えない「意識」も同じように存在する、つまり、「もの」と「意識」は繋がっている、という考え方である。そうすると、あの大黒屋を包む独特の「空気」や「気配」への合点もいく。アートの精神は形として目に見えるものではないのだが、旅館にとって極めて重要な「空気」「気配」を作るという大きな役目を担っていた。人が「何か好きだな」と、漠然と何かを好きになる理由の大部分は、この説明できない「空気」「気配」である。大黒屋のリピーター率の理由も、おそらくここにあると判断して良いだろう。

感性が失われつつある時代に必要なのは紛れもなくアートである。アートの精神は魂の純潔さから生まれ、それは人が本来持つべき純粋性を覚醒させる。確かなものが見えづらくなった世の中で、ただ一つアートだけは毒されずに純粋を貫く。人がアートを求めるのは、きっと皆、真実にもっともっと触れたいからなのだ。そう考えた時、僕はこの大黒屋のアートスタイル経営を、成功するべくして成功したのだらうと考える。そして、アートの持つ力、可能性の大きさを前例として証明し、アートが資本主義経済の中でも通用することを教えてくれた。アートには様々な場所におけるの最も大切な、「空気」や「気配」を作る力があるのだ。それはその人自身から発せられるものも含めて、だ。この、目に見えない、しかし最も重要なことを大黒屋は形にして証明してくれた。

### 最後に

僕はこの本との出会いから、実際に旅館へと足を伸ばし、その「空気」や「気配」を実体験として体験してきた。室井氏に直にお話も聞いた。それは決して本を読むだけでは到底得られない体験であり、僕のかげがえのない宝になった。こういった実体験、という体験は本当に大切に、たくさんの人にこの行為の素晴らしさを感じてほしいと思う。気になったら行ってみる、触れてみる、感じてみる。それは感性を磨くことでもあるし、一つのアートの精神でもあると思う。純粋性というのはいつだって、普遍的で、崇高で、輝きに満ちたものだと思うので、それは人が無くしてはいけないものじゃないかな、と。

ツムラクリエイション 津村修二 (2012年8月8日)